

「帝国地図」作成への誘惑

末吉 高明

七〇年前、米国南長老派教会が、大学教育をこの地で開始したときの議事録には、「学生に現代社会の問題を学修させること、そして、それら問題の解決に向けて邁進するように奨励すること」が設立事由として記されている。

私たちのミッションが、専門研究自体というよりも、教育研究とその実践にあることをあらためて建学憲章に銘記したのは、創立六〇周年記念が契機であった。同時に、大学規模のコンパクト化と並行して、現代社会に必要とされるカリキュラム改革としてメジャー制度を導入した。その後、一〇年を経過して、創立七〇周年を迎えている現在、私たちが、讃岐の片隅で展開する大学教育は、どのようなものであるべきなのだろうか。

まず、一〇年前には、全く予想しなかった事態が発生した。三・一一、東日本大震災の発生とヘフクシマへの経験である。並行して、特にここ数年、AI、IT、生命科学を中心とした科学技術の飛躍的な発展が、急速に展開されつつある。また、予測されたように、人口減少と高齢化現象は、スピードが緩和されることなく、進行している。経済では、コミュニケーション科学の進展に支えられてグローバル化の波が世界を駆け巡る。そして、これら多様な

変化の集中的結果として生み出された不安に耐えられない人々の隙間をねらって、感情の政治が世界的規模で猛威を振るっている。

歴史の分岐点が明白になりつつある現代社会で、研究にたずさわる者として、私たちが、留意して銘記すべきことがある。

J・L・ボルヘスの愛読者には、よく知られた『学問の厳密さについて』という小品だ。ある帝国で、地図作成技術が極められた。一州の地図は、一市全域を覆い、帝国全土の地図は、一州全体を覆うほどの大きな地図となった。しばらくすると、この膨大な地図でさえ、まだ不完全だと考えられようになり、帝国と同じ大きさで一点一点が正確に照応しあう帝国地図を作りあげた。ところが、しだいに人々は地図学に関心を失い、巨大な地図は無用になって、風雪にさらされ放置される。やがて、帝国の砂漠では、獣や乞食の飯の宿になった地図の断片が時に発見され、それが唯一、地図学を偲ばせる物となる。

今、建学以来七〇年の歩みを振り返り、私たちは、気づかぬ間に「帝国地図」の作成に専念しているのでは、との問いを立てるのは、依然、有効であろう。

了